

7-13世紀の東アジアにおける仏教彫刻の研究

Nara Women's University

人文科学系・人文社会学領域　**佐藤　有希子**　准教授　SATO　Yukiko　博士(文学)(東京大学)

■研究キーワード　日本彫刻史,中国彫刻史,仏像,仏画,文物交流,毘沙門天,舎利,聖徳太子

■主な所属学会　東岳美術史学会,仏教芸術学会, 美術史学会

■研究者総覧　https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.99feeecaa3e93928520e17560c007669.html

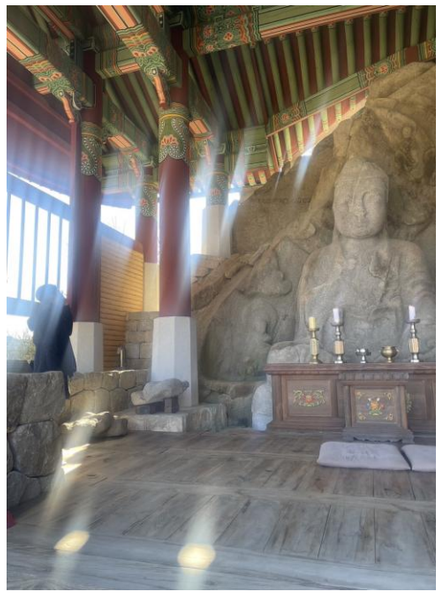
研究者総覧

研究概要

私は美術史学を専門としており、特に7世紀から13世紀頃までの東アジア全域の仏教彫刻の造形と歴史に焦点を当てています。研究対象地域は中国、朝鮮半島、日本が中心です。これまで、毘沙門天信仰の成立と広がり、そしてそれに伴う美術作品の変遷について研究してきました。最近では、毘沙門天の研究と並行して、平安時代後期の法隆寺の美術にも注目しています。

また、8K3Dデータを用いた特別授業などを通じて、最新の技術を活用した文化財の研究・教育にも取り組んでいます。毎年、奈良市美術館と本学の連携事業として、仏教美術講座を開催したり、幼稚園での講演会で仏像の見方についてレクチャーしたりしてきました。これらの活動を通じて、仏教美術の多面的な研究とその社会的意義の普及に努めています。

美術史学は、美術作品を通じて歴史を考える学問です。美術作品は、先人たちの知性と技が凝縮された歴史的な「たからもの」です。その価値を解明し、人々に伝えることが私の使命と考えています。



調査風景（韓国・奉化北枝里石仏）



著書『毘沙門天像の成立と展開』(2022)

アピールポイント

東アジアの仏教美術、特に彫刻に焦点を当てて研究を行っています。主な研究テーマとして、以下のものがあります。

1. 11-12世紀の法隆寺における仏教美術作品の研究(2023年～現在)
   このテーマでは、法隆寺における11-12世紀の仏教美術作品を対象に、日宋間の仏教文化交流の観点からその特徴や意義を明らかにすることを目指しています。
2. 日宋文物交流とその歴史的意義(2019年～2020年)
   北宋・真宗時代(997年-1022年)を中心に、日本と宋の間で行われた文物の交流とその歴史的意義について研究しました。
3. 毘沙門天像の成立と展開(2005年～現在)
   唐・宋・元から平安・鎌倉時代にかけての毘沙門天像の成立と展開について、東アジア全域を視野に入れて研究を行いました。

これらの研究を通じて、東アジアにおける仏教美術の多様な展開と文化交流の実態を明らかにし、美術史学の発展に寄与することを目指しています。

研究のアピールポイントは以下の通りです。

1. 東アジア全域を視野に入れた仏教美術研究
   日本だけでなく、中国や朝鮮半島を含む広い視野で仏教美術を研究しています。文化交流や信仰の広がりとともに美術がどのように変遷したかを追究し、地域間のつながりを明らかにすることに取り組んでいます。
2. 美術史学の社会的意義の普及
   学術研究を進めるだけでなく、その成果を広く社会に還元することを重視しています。学会発表や論文執筆に加え、一般向けの講演や市民講座にも積極的に関わり、仏教美術の魅力を伝えることに努めています。
3. 学際的なアプローチによる研究の深化
   歴史学、宗教学、考古学など、他分野との連携を重視しながら研究を行っています。異なる視点を取り入れることで、美術作品の背景にある歴史的・宗教的要素をより深く理解することを目指しています。